

聾学校幼稚部における教師と聴覚障害幼児との相互作用

都 築 繁 幸 (愛知教育大学障害児教育講座)

(2004年10月29日受理)

Interaction between Teacher and Deaf Child in Kindergarten of School for the Deaf

Shigeyuki Tsuzuki (Department of Special Education, Aichi University of Education)

要約 本研究では、加齢に伴うコミュニケーション・モードの変化と成立水準の変化について検討した。手話を用いながらコミュニケーションを図っている聾学校での教師1名と幼児2名のX学級の年少から年中、教師2名と幼児5名のY学級の年中から年長の段階の朝の話し合いの場面を分析の対象とした。その結果、X学級のC1児、C2児2名の幼児は85%以上がコミュニケーションが成立していた。Y学級では、例外はあるものの、非音声形態が優位なC3児、口話のみが優位なC4、C5児も、口話と手話を併用してコミュニケーションを図るC6、C7児も成立状態が約80%で安定していることがわかった。コミュニケーション・モードの変化では、年少から年中のX学級ではC1、C2児共に音声形態が増加していた。年中から年長のY学級では、幼児同士の関わりが複雑になり、相手によってコミュニケーション・モードを使い分け、コミュニケーション・モードが多様することがわかった。

Keywords :

I はじめに

筆者は、これまでに聾学校幼稚部における教師-幼児の相互作用を検討するために口話法の3歳児、4歳児、5歳児学級(都築, 1997)、手話、キュード・スピーチを使用している3歳児学級と4歳児学級(都築, 2002)、手話と口話を積極的に活用している4歳児学級(小木曾・都築, 2002)、手話と口話を積極的に活用している5歳児学級(都築, 2001a)、手話と口話を積極的に活用している3歳児学級(都築, 2001b)を対象に分析を進めてきた。

これらの研究は、コミュニケーション・モードとコミュニケーション成立水準について各年齢層の様相を明らかにしようとしたものだが、経年的変化については分析を加えてこなかった。

本研究では、手話と口話を積極的に活用している聾学校幼稚部の3歳児学級と4歳児学級をとりあげ、加齢に伴うコミュニケーション・モードの変化と成立水準の変化について検討する。

II 方法

(1) 対象

手話を用いながらコミュニケーションを図っているM聾学校における朝の話し合いの場面をビデオテープに録画し、分析の対象とした。

今回は、XとYの学級を対象にした。X学級は、教師1名、幼児2名である。この学級が幼1(3歳児学級)の9月期と幼2(4歳児学級)の5月期の2回の授

業を録画した。Y学級は、教師2名、幼児5名である。この学級が幼2(4歳児学級)の9月期と幼3(5歳児学級)の5月期、6月期の3回の授業を録画した。

Y学級では、2名の教師が担当しているが、Ⅱ期ではT2が、Ⅲ期ではT1が主に活動を進めていた。

X学級のC1児の聴力レベルを表1に、以下、同じようにX学級のC2児を表2に、Y学級のC3児を表3に、C4児を表4に、C5児を表5に、C6児を表6に、C7児を表7に示した。

C1児のコミュニケーションの様子は、受容面では、言葉のみで理解できることが増えてきている。身振り、写真、絵カードなどを手掛かりにすると日常のことはほとんど理解できる。表出面では、簡単な言葉と身振り、声で表現する。教師や友達の表現(言葉、身振りなど)をよく見ていて自分でも使おうとする。3~4語文で表現する。

C2児のコミュニケーションの様子は、受容面では、経験したことについては身振り(+言葉)でだいたい理解できる。新しいことを伝える時などに写真、絵カード、実物が必要なこともある。表出面では、声、身振り(名前については指文字も使う)中心に表出している。自分で体験して印象的だったことについては繰り返し伝えようとする。また、自分でみたものなどを絵に描いて表現する。

C3児のコミュニケーションの様子は、主に、身振り(手話、指文字)で理解と表出。人を呼ぶときに音声が出ることもある。視覚的手掛かりがかなり必要で

ある。身近な人の名前以外への文字、指文字に対する興味はまだ少ない。口形には注目する。

C4児のコミュニケーションの様子は、身近な大人へは音声のみで表出し、理解については内容や状況に応じて身振りや指文字、ひらがな、視覚的手掛かりを必要とする。友達とは主に身振りと音声（やや音声優位）でやり取りし、特にC1児やC4児へは音声を伴わない身振りや指文字（人名）、相手の発声をまねた声で表出する。

C5児のコミュニケーションの様子は、主に身振り（手話、指文字）を伴う音声でやり取りする。人名についてはひらがなや指文字に対する興味が出てきて一音ずつ発音を伴って表出したがる。よくわかる状況では音声（口形）で理解する。

C6児のコミュニケーションの様子は、主に、音声を伴う身振り（手話、指文字）でやり取りする。大人とは日常の使いなれた言葉は口形と音声で理解・表出している。友達とは音声を伴わない身振りが増える。両親は聴覚障害であり、本時には手話に可能な限り音声をつけている。

C7児のコミュニケーションの様子は、主に身振り（手話、指文字）を伴う音声でやり取りする。指文字に大変興味を持ちひらがな50音と発音可能な音とほぼ対応できている。物や人の名前を音声と指文字で表現したが、また教えて欲しがらる。

表1 X学級C1児の聴力レベル

聴力(dB)	500Hz	1,000Hz	2,000Hz	平均聴力	装用値	500Hz	1,000Hz	2,000Hz
右	90	90	90	90	両耳	59	81	71
左	110	115	110	113				

表2 X学級C2児の聴力レベル

聴力(dB)	500Hz	1,000Hz	2,000Hz	平均聴力	装用値	500Hz	1,000Hz	2,000Hz
右	100	100	105	101	右	56	58	66
左	100	100	105	101	左	56	63	66

表3 Y学級C3児の聴力レベル

聴力(dB)	500Hz	1,000Hz	2,000Hz	平均聴力	装用値	500Hz	1,000Hz	2,000Hz
右	105	120	130	119	両耳	69	81	71
左	120	125	130	125				

表4 Y学級C4児の聴力レベル

聴力(dB)	500Hz	1,000Hz	2,000Hz	平均聴力	装用値	500Hz	1,000Hz	2,000Hz
右	90	95	100	95	右	26	33	46
左	85	100	105	98	左	51	38	41

表5 Y学級C5児の聴力レベル

聴力(dB)	500Hz	1,000Hz	2,000Hz	平均聴力	装用値	500Hz	1,000Hz	2,000Hz
右	85	95	90	91	右	56	53	61
左	90	100	105	99	左	49	48	56

表6 Y学級C6児の聴力レベル

聴力(dB)	500Hz	1,000Hz	2,000Hz	平均聴力	装用値	500Hz	1,000Hz	2,000Hz
右	95	105	125	108	右	61	68	76
左	95	110	120	109	左	66	68	86

表7 Y学級C7児の聴力レベル

聴力(dB)	500Hz	1,000Hz	2,000Hz	平均聴力	装用値	500Hz	1,000Hz	2,000Hz
右	105	110	105	108	右	51	53	56
左	105	95	85	95	左	46	38	56

(2) 手続き

ビデオテープレコーダーで教師及び幼児の発信行動に焦点を当てながら授業を録画した。

録画された教師—幼児間の発信行動と反応、幼児—幼児間の発信行動と反応を文章化し、それに対応した手話を付記した。分析時間は30分とし、朝の話し合いの場面から抽出した。

授業の流れの概要を以下のとおりである。X学級の幼1（3歳児学級）の9月の授業を表8に、幼2（4歳児学級）の5月の授業を表9に示した。I期は幼1（3歳児9月）、II期は幼2（4歳児5月）とした。

Y学級の幼2（4歳児学級）の9月の授業を表10に、幼3（5歳児学級）の5月のそれを表11に、幼3（5歳児学級）の6月のそれを表12に示した。I期は、幼2（4歳児9月）、II期は幼3（5歳児5月）、III期は幼3（5歳児6月）とした。

対話の成立は、発信内容の意図に沿う反応であることとし、対話の成立—不成立を算出し、加齢に伴う成立水準の変化を分析した。表13にはコミュニケーションの成立水準（都築 2001a）を示した。

コミュニケーション・モードは、口話のみ、手話のみ（ジェスチャーを含む）、口話と手話（併用）とに分類（都築 2001a）し、コミュニケーション・モードの変化について分析した。

表8 幼1（3歳児学級）9月の活動の流れ

学習活動	幼児の様子
・遊んでいたボールを片付け、朝の話し合いを始める。	・C1児が指文字でC2児をあらわす時、指文字の間違いを教師が正す。
・シールを黒板にはる。	・C1、C2児共教師の声かけによって、片付けをすることができる。
・休んでいる友達のシールを黒板にはる。	・C1、C2児共、「元気だよ」と相手に伝えることができる。
・手遊びをする。	・音声がでないC1児について、教師が繰り返し声を出して言うことによって、音声と手話で表出する。
・あいさつをする。	・シールをはりたがり、「ちょうだい」と音声と手話で訴える。
	・教師の促しで、友達の名前を音声と指文字であらわすことができる。
	・面白がって何度も繰り返し行う。C2児は、教師に終わりとと言われても「もう一回」と何度もせがむ。
	・教師と一緒に「おはよう」のあいさつをする。音声のみ。

表9 幼2(4歳児学級)5月の活動の流れ

学習活動	幼児の様子
・着ている服を教師が絵に書き、それを色ぬりする。	<ul style="list-style-type: none"> ・着ている服の色を確認させ、欲しい色の名前を音声と指文字で復唱する。 ・C2児から始めたが、C1児は待ちきれない様子で、身振りのみで自分の着ている服について教師に伝えようとする。 ・C2児は物足りない様子で「にゃお」というが、
・欠席している友達の確認をする。	<ul style="list-style-type: none"> C1児に代わってと言われ、交代する。 ・C1児の欲しい色をC2児がとって渡してあげる。その際、C2児は教師のまねをし、2本とって「どっち」と言う。C1児が選ぶ。 ・C1児もC2児も、ぬりたい色をよく理解している。 ・写真を見ただけで友達の名前が音声と指文字で表出できる。 ・友達の欠席について理由を知りたがる。

表10 幼2(4歳児学級)9月の活動の流れ

学習活動	幼児の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ名前を呼び、幼児が日記を見ながら話をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どの幼児も自分の名前を口形のみで理解し、返事をするができる。 ・幼児の話聞いて、同じ体験を自分で話することができる。 ・C4、C5児は教師が介入しなくても、口話のみ、口話+手話でコミュニケーションを行う。 ・習慣化されていて、次に何をやるのか、自ら言うことができる。 ・その時間に自分が何をやりたいたいのかが言える。
・今日のお話をする。	

表11 幼3(5歳児学級)5月の活動の流れ

学習活動	幼児の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ名前を呼び、幼児が日記を見ながら話をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の体験について、かなり長い文章で話することができる。 ・話し終わった後、幼児が友達の名前を呼び、呼ばれた幼児は口形だけで自分の名前を理解することができる。
・今日のお話をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・幼2の時と比べ、同じ話題が続くようになる。 ・友達の話しを聞いて「悲しい」などの感情を表す幼児もいる。 ・友達の話を聞いて疑問に思ったことを質問する。 ・次に何をやるか理解し、発言できる。 ・「雨が降っている」と、いつもと違う状況であることを理解し、外で遊べないことを訴える。

表12 幼3(5歳児学級)6月の活動の流れ

学習活動	幼児の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ名前を呼び、幼児が日記を見ながら話しをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・わからないことを進んで友達に聞くことができる。 ・友達の話を聞いて、同じ日に自分が何をしていたのか発言することができる。 ・友達の発言を理解し、自分に都合の悪いことを無視する様子が見られる。 ・C4、C5児のおしゃべりが増える。
・今日のお話をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・次に何をやるのかを理解し、発言できる。 ・自分がその時間に何をしたいかを考え、発言できる。 ・自分や友達の当番が何か調べ、発言する。

表13 コミュニケーションの成立水準(都築, 2001a)

A水準	言語関係成立水準：相互交渉が一往復以上続いているもの。 T(教師)→C(幼児)→T→, C→T→C→
B水準	言語関係成立しかけの状態：相互交渉が往復どまりになっているもの。 T(教師)→C(幼児)→, C→T→
C水準	言語関係無成立の状態：一方的な働きかけのみで終始しているもの。 T(教師)→, C(幼児)→

III 結果

(1) 成立水準

① X学級における幼1(3歳児9月)から幼2(4歳児5月)の変化

表14にC1児とC2児のコミュニケーション成立水準を示す。表中のⅠ期は幼1(3歳児9月)、Ⅱ期は幼2(4歳児5月)である。

C1児は、A水準が37.5%から48.3%に増加し、B水準とC水準は、それぞれ43.7%から36.3%, 18.7%から15.0%に減少した。

C2児もC1児と同様にA水準が17.4%から52.4%に増加し、B水準とC水準は、それぞれ39.1%から34.4%, 43.5%から13.1%に減少した。

A水準とB水準を含めたものが、言語関係成立又は成立しかけの状態であり無成立ではない状態にある。

Ⅱ期では、C1児とC2児ともにA水準が約50%になっている。AとB水準の合計がほぼ85%以上となっており、コミュニケーションが成立している状態にある。

表14 幼児別に見たコミュニケーション成立水準(幼1→幼2)

	A水準		B水準		C水準	
	I	II	I	II	I	II
C1	37.5(12)	48.3(29)	43.3(14)	36.6(22)	18.7(6)	15.0(9)
C2	17.4(4)	52.4(32)	39.1(9)	34.4(21)	43.5(10)	13.1(8)

② Y学級における幼2(4歳児9月)から幼3(5歳児5月)・幼3(5歳児6月)の変化

表15にC3児からC7児までの幼児別にコミュニケーション成立水準を示す。表中のⅠ期は、幼2(4歳児9月)、Ⅱ期は幼3(5歳児5月)、Ⅲ期は幼3(5歳児6月)である。

C3児は、A水準とB水準の合計がⅠ期では58.3%, Ⅱ期では74.0%, Ⅲ期では79.7%であり、コミュニケーションが成立している状態が増加している。C水準はⅠ期では41.6%, Ⅲ期では20.5%と減少した。A水準はⅡ期とⅢ期ではいずれも40%代である。

C4児は、A水準とB水準の合計がⅠ期で86.6%, Ⅱ期では83.8%, Ⅲ期では91.7%とほぼコミュニケーションが成立している。

C6児は、A水準がⅠ期では38.9%, Ⅲ期では

43.9%であり、若干、増加した。コミュニケーションが不成立の状態であるC水準はⅠ期では22.2%，Ⅲ期では24.4%とはほぼ同じである。

C 7 児もⅠ期からⅡ期にかけてA水準が39.0%から57.1%に増加し、B水準、C水準はそれぞれ41.1%から25.0%へ、19.5%から17.9%となっている。Ⅲ期では、A水準が30.8%とⅠ期やⅡ期よりも減少し、B水準が35.9%，C水準が33.3%と増加した。

このように非音声形態が優位であるC 3 児、口話のみが優位なC 4 とC 5 児、口話と手話を併用してコミュニケーションを行うC 6 とC 7 児は、年長組であるⅡ期、Ⅲ期で成立状態が約80%となっている。

表15 幼児別に見たコミュニケーション成立水準(幼2→幼3)

	A水準			B水準			C水準		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III
C 3	25.0 (6)	44.4 (12)	41.0 (16)	33.3 (8)	29.6 (8)	38.7 (15)	41.6 (10)	25.9 (7)	20.5 (8)
C 4	40.0 (6)	30.7 (4)	41.7 (5)	46.6 (7)	53.8 (7)	50.0 (6)	13.3 (7)	15.3 (2)	8.3 (1)
C 5		63.6 (14)	45.8 (11)		22.7 (5)	37.5 (9)		18.6 (3)	16.7 (4)
C 6	38.9 (7)		43.9 (18)	38.9 (7)		31.7 (13)	22.2 (4)		24.4 (10)
C 7	39.0 (16)	57.1 (16)	30.8 (12)	41.1 (17)	25.0 (7)	35.9 (14)	19.5 (8)	17.9 (5)	33.3 (13)

(2) コミュニケーション・モード

① X学級の幼1(3歳児9月)から幼2(4歳児5月)の変化

C 1 児とC 2 児のコミュニケーション・モードの変化を表16に示す。

C 1 児は、口話+手話の併用モードが42.5%から51.8%に、口話のみと手話のみは、それぞれ35.0%から29.1%，22.5%から19.4%と変化した。

C 2 児は、口話+手話の併用モードが25.0%から56.9%に、口話のみと手話のみは、それぞれ40.0%から20.2%，35.0%から22.8%と変化した。

音声形態と非音声形態を比較する。音声形態を口話+手話の併用モードと口話のみの場合、手話のみの場合を非音声形態とみなす。音声形態は、C 1 が77.5%から80.9%に、C 2 児が65.0%から77.1%に、いずれも音声形態が若干、増加した。

表16 幼児別に見たコミュニケーション・モードの変化(幼1→幼2)

	口話のみ		手話のみ		口話+手話	
	I	II	I	II	I	II
C1	35.0(14)	29.1(21)	22.5(9)	19.4(14)	42.5(17)	51.8(37)
C2	40.0(8)	20.2(16)	35.0(7)	22.8(18)	25.0(5)	56.9(45)

② Y学級における幼2(4歳児9月)から幼3(5歳児5月)・幼3(5歳児6月)の変化

幼児別にみたコミュニケーション・モードの変化を表17に示す。

C 3 児は、Ⅰ期からⅡ期・Ⅲ期にかけて非音声形態

である手話のみの場合が68.2%から91.4%と80.0%へと増加した。音声形態である口話のみの場合は、4.5%，0%，6.4%といずれも低かった。

C 4，C 5，C 6，C 7 児も非音声形態である手話のみの場合が、それぞれ7.1%から27.0%と33.3%へ、12.2%から16.7%へ、10.0%から14.9%へ、7.7%から13.0%と16.6%へと増加し、少しではあるが、非音声形態が増加した。

子ども同士の関わりが複雑なY学級では、年長になると相手によってコミュニケーション・モードを使い分け、コミュニケーション・モードが多様化するといえる。

表17 幼児別に見たコミュニケーション・モードの変化(幼2→幼3)

	口話のみ			手話のみ			口話+手話		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III
C 3	4.5 (1)	0.0 (0)	6.4 (3)	68.2 (15)	91.4 (32)	80.8 (38)	27.3 (6)	8.6 (3)	12.8 (6)
C 4	50.0 (7)	54.6 (6)	33.3 (4)	7.1 (1)	27.3 (3)	33.3 (4)	42.9 (6)	18.1 (2)	33.3 (4)
C 5		19.5 (8)	43.3 (13)		12.2 (5)	16.7 (5)		68.3 (28)	40.0 (12)
C 6	40.0 (8)		25.0 (12)	10.0 (2)		14.9 (7)	50.0 (12)		60.4 (29)
C 7	34.6 (18)	26.1 (12)	19.4 (7)	7.7 (4)	13.0 (6)	16.6 (6)	57.7 (30)	60.9 (28)	63.8 (23)

Ⅳ 考察

(1) 成立水準の変化

① X学級における幼1から幼2への変化

コミュニケーション成立水準は、C 1，C 2 児ともにA水準が増加し、B水準とC水準が減少した。

C 2 は、発言が急増し、コミュニケーション水準が増加したが、Ⅰ期では幼児同士のコミュニケーションがほとんど見られなかったのに対し、Ⅱ期では幼児同士のコミュニケーションが増えた。教師も幼児同士のコミュニケーションがより活発になるように活動を進めていた。このことから幼児同士の係わり合いが、お互いのコミュニケーションの成立を助長していると考えられる。

② Y学級における幼2から幼3への変化

C 7 を除き、A水準とB水準とを合わせたコミュニケーションが成立している状態は、C 3 はⅡ期が74.0%，Ⅲ期が79.7%，C 4 児はⅡ期が83.8%，Ⅲ期が91.7%，C 5 児はⅡ期が86.3%，Ⅲ期が83.3%，C 6 児はⅢ期が75.6%と約80%である。この割合は、不成立状態を示すC水準と比較すると多い。この学級では、2名の教師が担当している。Ⅱ期ではT 2 が、Ⅲ期ではT 1 が主に活動を進めていた。幼3の段階では教師が交代してもコミュニケーションが成立していることが伺える。C 7 児は、Ⅱ期では成立状態が82.1%であったが、Ⅲ期で66.7%に減少した。これは、実際には、Ⅲ期の活動時に、例えば、C 7 児がなわとびを

飛んでいるのを見て、C6児が「私の方がなわとび上手、少し貸して」といったのに対してC7児が無視をするなど、教師や幼児の呼びかけに対して、意味を理解していながら、気に入らなかつたりするとわざと反応せず、答えをはぐらかしたり、無視したりする場面が多く見られたためである。またC6児のⅢ期のC水準が増加したのは、C6児はC7児と仲がよく、活動中に二人でおしゃべりをする姿がよく見られたが、前述したように、C7児が反応しない場面が見られ、C6児のC水準が増加したようだ。

都築（2001a）は、5歳児と6歳児のコミュニケーション成立水準別に検討した結果、5歳児群はコミュニケーションをする相手如何にかかわらず、非音声形態が多く、前言語的なコミュニケーションによってことを理解していく過程にあり、6歳児群は相手が教師の場合には音声形態が多くなり、前言語的なコミュニケーション段階よりもさらに発達した段階にしていることを示している。今回の結果において、口話のみと口話+手話である音声形態と手話のみの場合の非音声形態を比較すると、C3児を除き、Ⅲ期においてC4児が66.6%、C5児が83.3%、C6児が85.4%、C7児が83.2%と、音声形態が非音声形態をかなり上回っていた。このことから対象児たちは、前言語的なコミュニケーション段階よりも発達した段階にしているとみなせる。

(2) コミュニケーション・モードの変化

① X学級における幼1から幼2への変化

C1児は、音声形態でコミュニケーションを行い、A水準、B水準を合わせると、80%以上になっている。授業の様子を見ても教師の動きや発言に対する反応も早く、「ちょうだい」など、自分の欲求も音声と手話で伝えている。これは、C1児の平均聴力は右が90dBと比較的軽く、コミュニケーションの様子も表出面では2～3語文で話すほどコミュニケーション能力が発達していることにもよる。一方、C2児は、Ⅰ期の時点では発言数も少なく、教師に何度も促されて返事をしたり、教師が指文字で何度も繰り返して表したり、模倣させたりする様子がよく見受けられた。また、身振り、手話のみの非音声形態で要求する場面もよく見られた。平均聴力は左右ともに101dBであり、3歳の時点ではまだ口話のみ、身振りのみを中心にコミュニケーションを行っているといえる。しかし、Ⅱ期になるとC2児の発言数が一気に増え、約90%程度の割合でコミュニケーションが成立している状態になった。コミュニケーション・モードも音声形態が約80%で、その中でも口話+手話の併用モードが25.0%から56.9%と急増した。このことが成立水準を増加させたものと考えられる。C1児もⅠ期からⅡ期にかけて発言数が増え、成立水準も80%以上となり、口話+手話

の併用モードが50%を越えた。

これらのことから手話と音声を併用するコミュニケーション方式は、幼児の理解を促し、発言へと導き、コミュニケーションを成立させる大きな要因であるといえる。

② Y学級における幼2から幼3への変化

C3児は、手話のみがⅠ期で68.2%、Ⅱ期で91.4%、Ⅲ期で80.8%となっており、主に手話のみでコミュニケーションを行っていることがわかる。これは、C3児の平均聴力が、右が119dB、左が125dBであり、最重度であるために主に身振り（手話、指文字）で理解、表出をしているためであると考えられる。C3児の影響によりC4児、C7児は、いずれもⅠ期からⅡ期にかけて手話のみが増加している。また、Ⅱ期からⅢ期にかけては、C3児を除く全員が手話のみである非音声形態の割合を増加させている。活動の様子を見てみると4歳の時点では、「幼児にとって教師の存在はコミュニケーションが成立するために重要」（都築、2001a）と報告されたようにC3児とのコミュニケーション時に教師を介して行う幼児が多く見られたことに対して5歳になると、どの幼児も直接、C3児とコミュニケーションを行っている場面が多くなる。これは、「コミュニケーションを行なう相手によって6歳児群ではコミュニケーション形態を変えていた」（都築、2001a）という報告と同様である。

川崎ら（1998）は、「自分の中に何か陳述したい内容があり、身振り・指差し・動作といった前言語的手段ではそれらが伝えられないことが子どもにわかり始めてくると、自分の使える最も言語的な手段によって表現しようとする内的規制が働くのではないか」との述べ、自分の活用できるあらゆる手段を組み合わせるコミュニケーションを行っており、年齢に伴って話題が広がり、コミュニケーションが複合化していることを示している。都築（2001a）も「6歳児群は5歳児群に比べて自分の活用できるあらゆる手段を用いてコミュニケーションをしており、そのために話題も広がっている」と述べている。今回においてもⅠ期からⅡ期にかけて幼児同士のコミュニケーションが増え、同じ話題が長く続くようになるという同様な結果が得られた。

C4児、C5児は、主に口話のみをコミュニケーション手段として用いていて、コミュニケーションは約80%成立している。これは、C4、C5児とも聴力レベルが比較的軽く、音声のみで理解を示したり、音声優位のコミュニケーションを行っていた。また、このM聾学校は、教師が積極的に手話や指文字を使用している聾学校であるためにC6、C7児は口話+手話の併用モードでコミュニケーションを行っていることが多いことがわかる。C4、C5児と比べると聴力レベルは軽くはないが、C4、C5児と成立水準が変わら

ないことから、手話と音声の併用は、幼児の理解を促し、コミュニケーションを成立させる大きな要因となることがいえる。

(3) コミュニケーション・モードと成立水準との関連

幼1から幼2の結果をみるとC1, C2児共にⅠ期からⅡ期にかけて成立水準のコミュニケーション成立状態が増加しており、コミュニケーション・モードは口話+手話の併用モードが増加している。

幼2から幼3の結果では、併用モードを主に使用するC6, C7児は、平均聴力がよく、口話を優位にしようとするC4, C5児と、Ⅱ期ではほぼ同じ成立水準を保っている。

以上のことから、コミュニケーション・モードと成立水準は深く関連しているのではないかと推測される。

しかし、本研究では、コミュニケーション・モード別に成立水準の変化を算出するまでには到らなかった。今後、コミュニケーション・モードと成立水準との関連性について分析し、この二つの関係を明らかにしていく必要があると考える。

聴覚口話法に基く教育が展開される聾学校幼稚部の教師の発話行動の分析(都築, 1997)と本研究を比較してみる。都築(1997)は、学年が上昇するにつれて教師を媒介としたやり取りの展開から教師を媒介としない幼児同士のやり取りに移行していると述べているが、本研究でも、年長になるとコミュニケーション・モードが多様化され、幼児同士のコミュニケーション活動が深まっていることが推察される。また、4歳児では教師が言語化した初語を繰り返してコミュニケーションする活動が多く、5歳児では、発言するように促されれば話ができることが多いという都築(1997)の結果に対して、本研究では、5歳児になると話題も長く続き、内容にも深みが出た。4歳児の時点では幼児は他児の話聞いて自分の体験に結び付けて話をする事ができ、教師の働きかけも幼児の発話を取り上げて話を盛り上げるような支援の仕方が多く見られた。

幼2の9月期のやりとりの一部を示す。

C6: おととい保育園でおいもをとったよ。

T2: おととい保育園でおいもをとったよ。いっぱいだったの?

C4: Tちゃんもとった。

T2: Tちゃんもとったの? どこで?

C4: Hちゃんのおうちで。

T2: そうだ。同じ。Hちゃんのお家でとったのと同じ。Tちゃんね、Hちゃんのお家でおいもを一緒にとったんだよ。

C7: 私、おばあちゃんと一緒にとった。

T2: Aちゃんもね、おばあちゃんと一緒においもとったって。同じだ。

C3: 先生! Jちゃんも同じおいも、家。

T2: Jちゃんも同じおいも、お家にあるの? お家を見た?

C3: (うなづく)

これらのことから手話を導入している本研究の子どもたちは、聴覚口話法を用いた聾学校の子どもたちよりもコミュニケーション能力が発達しているのではないかと考えた。

都築(2001a)は、「手話や身振りを使うようになった子どもたちは、友達同士のコミュニケーションが盛んであり、相手によってコミュニケーションの手段を使い分けている子も見られた」、「親や先生と話す時には音声のみまたは手話で話し、友達と話すときには手話のみを用いるようになった」、「多くの子どもが聞こえる親や教師には声で、聞こえない友達には手話でと、相手によって音声語と手話を使い分けられるようになってきている」という教育現場で示された実践報告を支持して6歳児群ではコミュニケーション形態を変えていたと述べている。本研究でも年長になると幼児—幼児間のコミュニケーションが増え、コミュニケーション・モードが多様化し、相手によってコミュニケーション手段を使い分けていた。また、都築(2001a)は、5歳児群はコミュニケーションをする相手如何にかかわらず、非音声形態が多く、前言語的なコミュニケーションによって言葉を獲得していく過程にあり、6歳児群は相手が教師の場合には音声形態が多くなることから前言語的なコミュニケーション段階よりもさらに発達した段階にいと述べている。本研究において、口話と手話の併用モードを主に用いていたC6, C7児を見ると、年中の時点で音声形態が約90%であり、都築(2001a)が述べた6歳児群と同じコミュニケーション段階にいたのではないかと考えられる。

V おわりに

本研究では、加齢に伴うコミュニケーション・モードの変化と成立水準の変化について検討した。

手話と指文字を用いながらコミュニケーションを図っているM聾学校の教師1名と幼児2名のX学級の年少から年中、教師2名と幼児5名のY学級の年中から年長段階の朝の話し合いの場面を分析の対象とした。ビデオテープレコーダーで教師及び幼児の発信行動に焦点を当てながら授業を録画し、録画された教師—幼児間の発信行動と反応、幼児—幼児間の発信行動と反応を文章化した。対話の成立を発信内容の意図に沿う反応であることとし、対話の成立—不成立を算出し、加齢に伴う成立水準の変化を比較分析した。また、コミュニケーション・モードは、口話のみ、手話のみ、口話と手話とに分類し、コミュニケーション・モードの変化について比較分析した。

その結果、成立水準の変化では、年少から年中のX

学級でC1, C2児共Ⅱ期はA水準が約50%になり、B水準とあわせると85%以上はコミュニケーションが成立している状態にあることがわかった。年中から年長のY学級では、例外はあるものの、非音声形態が優位なC3児も、口話のみが優位なC4, C5児も、口話と手話を併用してコミュニケーションを図るC6, C7児も、年長であるⅡ期, Ⅲ期では成立状態が約80%で安定していることがわかった。

コミュニケーション・モードの変化では、年少から年中のX学級で音声形態と非音声形態を比較してみるとC1, C2児共音声形態が増加していた。年中から年長のY学級では、幼児同士の関わりが複雑になり、Ⅱ期, Ⅲ期になると相手によってコミュニケーション・モードを使い分け、コミュニケーション・モードが多様することがわかった。

以上の結果から、次のことが考察された。成立水準の変化では、年少から年長のX学級で、幼児同士のかわりを深めることによって、お互いのコミュニケーション成立を伸ばしているのではないかと考えられた。また、手話を併用することによって、特にC2児の指文字、口形、発語とが結びつき、どんどん語彙や文を獲得し、コミュニケーション活動が活発化したのではないかと考えられた。また、年中から年長のY学級では、年長の段階で活動を進める教師が代わっても、安定してコミュニケーションが成立していた。また、被験児たちは、前言語的なコミュニケーション段階よりも発達した段階にいたと考えられた。

コミュニケーション・モードの変化では、年少から年中のX学級で音声と手話を併用してコミュニケーションを図ることは、幼児の理解を促し、コミュニケーションを成立させる大きな要因があると考えた。年中から年長のY学級では、川崎ら(1998)、都築(2001a)が述べているように、幼児同士の関わりが深まり、コミュニケーションが複合化し、話題が広がっていることが支持された。また、X学級と同様に、手話を併用することは、幼児の理解を促し、コミュニケーションを成立させる大きな要因であると考えられた。

引用文献

- 1) 川崎億子・斉藤佐和 2000 聴覚障害幼児の身振りと音声言語の発達の関係 心身障害者学研究, 24, 39-47.
- 2) 小木曾誉・都築繁幸 2002 聾学校幼稚部の教師と聴覚障害幼児のコミュニケーション行動における相互作用の分析 治療教育学研究 22, 55-64.
- 3) 都築繁幸 1997 障害児教育における授業構造の把握に関する基礎的研究(4) -聾学校幼稚部の教師の発信行動の分析から- 信州大学教育学部紀要 92, 53-64.
- 4) 都築繁幸 2001a 聾学校幼稚部の教師と聴覚障

- 害幼児の相互作用における発信行動の分析 愛知教育大学研究報告 第50輯(教育科学編) 15-21.
- 5) 都築繁幸 2001b 聾学校幼稚部における健聴教師・聴障教師と聴覚障害幼児との相互作用 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 4, 87-93.
 - 6) 都築繁幸 2002 聾学校幼稚部における教師の発信行動の分析